日本医史学雑誌　第68巻第3号（2022）　236–242

『神農本草経』の歴史

真柳　　誠

茨城大学

『神農本草経（本経）』は内容が知られる中国最古の薬物書であり，漢方でも重要古典とされる．しかし本書自体は早くに亡佚したため，諸書に引用された佚文から内容をうかがい知るしかない．近世以降は中国と日本で幾度も輯佚復原がなされ，相当に精度を上げてきているが，未解明や統一見解にいたらない問題もある．本書の歴史について批判的検討が不十分だったからといえよう．

「本草」の原義

阜陽漢墓（前165ころ埋葬）で出土した博物書の『万物』[1]には，動植鉱物の効果や用途が前220年以前の語法で記述されていた．『史記』倉公伝[2]によると，前漢の名医・淳于意は高后八年（前180）に陽慶に師事し，『薬論』ほかを伝授されたという．すると前3世紀には薬物知識が記録され，前2世紀になると薬論書も編纂されていた．

のち「本草」の語彙が出現する．『漢書』郊祀志に成帝（前33～前7）が「本草待詔」を罷免したとあり，楼護（紀元前後の医家）伝では護が幼少のとき「医経・本草・方術数十万言」を諳誦したという[3]．したがって前1世紀末ころには「本草」の語彙や「本草待詔」という職称，数十万言の一部をなす本草書があったとわかる．

『漢書』芸文志に「経方者，本草石之寒温」[4]という一節がある．これと関連づけ，本草とは「草に本づく」という解釈もあるが，曲説というしかない．なぜなら，楼護伝は本草を医経（医の経典）・方術（方の術）と並列していた．『漢書』芸文志でも，医書を医経（医の経典）・経方（経典の処方）・房中（房室の中）・神仙（神と仙人）に分類する．本を動詞，草を目的語とする「草に本づく」では，ほかの二字術語と相応しないからである．

ところで紀元前後の文献では，『呂氏春秋』に本生篇・本味篇，『淮南子』に本経訓，『論衡』に本性篇がある．医学古典でも『素問』に本病論篇，『霊枢』に本神篇・本蔵（臓）篇がある．これら用例の「本」が，すべて以下にある語の「本質」を意味するのはまちがいない．すると本草の原義は，「草（薬）の本質」と理解すべきだろう．これは神農が「農の神」であるのと対応し，上古中国語を模した擬古文ともいえる．

『本経』の編纂

いま復原可能な『本経』は思想・収載薬・薬名などの特徴と正史の記載から，中原で神農を称するグループにより西暦5年に原型が編纂された，と山田氏は論じる[5]．復原された『本経』をわたしが検討したところ，神農グループは薬業家だった．かれらが編纂に使用した文献にはかなりふるい伝承と思想がふくまれており，それが『本経』各論の薬名・気味・主治文に残存していた．この編纂過程は以下のように推測できる[6]．

①およそ365薬の気味・出処・主治に関する記載を，先行文献・伝承から蒐集した．
②当時の一般的薬名を正名とし，別流派やふるい薬名があれば一名として付記した．
③気味は特定の先行文献を踏襲した．
④具体的出処は秘密とし，出処不詳薬とともに抽象的に表現した．
⑤薬効未詳薬には，漠然と心身によいと理解される主治文を作成した．
⑥全体を上中下薬の3巻に分類し，あるいは玉石・草木などの自然分類も併用した．
⑦上中下薬の主治文を調整し，末尾に久服した場合の効果を適宜付記した．

⑧最後に薬物総論の序録1巻12条を新作し，計4巻の『本経』を完成した．

こうして編纂された『本経』は，薬を患者や臨床家のみならず方士らにも販売するための，「薬の本質」テキストと呼んでいい．当時の「くすり」の理想だった治療・滋養・保健・不老長生という全分野も網羅しようとしている．これゆえ徐々に普及して神仙家や名医に利用され，別の薬物や条文が増補された伝本も派生し，各種混乱を生じていた．

陶弘景の整理・編纂

華佗の弟子，呉普が編纂したとされる3世紀中期の『呉普本草』は，農書の『斉民要術』（530ころ）と類書の『太平御覧』（984）などに佚文がのこる．それらからすると，呉普の時代には神農以外に黄帝・岐伯・扁鵲・雷公などを称する，系統と内容の異なる本草書があった．そして『呉普本草』が引用する神農の薬物気味は，たかい割合で『本経』の気味と一致する．しかし現在に内容全体がほぼ伝わるのは，紀元5年に原形が編纂された『本経』系統しかない．

以後の『本経』は，陶弘景（456～536）が『神農本草経集注（本草集注）』を500年直前に編纂した段階までの伝承で，収載薬数や条文などに相当の混乱が生じていた．敦煌出土の『本草集注』序録に，「今之所存，有此四巻，是其本経．……魏晋以来，呉普・李当之等更復損益，或五百九十五，或四百卅一，或三百一十九．或三品混糅，冷熱舛錯，草石不分，虫樹（獣）无（無）弁．且所主治，互有多少」[7]，と弘景が記すからである．敦煌本序録ほかの文献記載によれば，『本草集注』の編纂はおそらく以下の過程をへていた．

①弘景は『本経』を4巻本といい，収載数が595薬・431薬・319薬の少なくとも3種の『本経』伝本を『本草集注』編纂の底本とした．同時に弘景注が多数引用する「仙経」「仙方」や，『本経』系以外の本草書，歴代名医の医方書等を参照したのもうたがいない．

②かれは『本経』各伝本の共通記載と一定の文体などから判断し，『本経』本来の365薬とその条文を抽出して大字で朱書した．

③同時に各伝本に共通して記載されない特徴から，後世追記された条文および追補された365薬とその条文を抽出．これを参照各書で補訂し，「名医別録（別録）」文として大字で墨書した．

④さらに計730薬に対し，従来からあった配薬論の「薬対」文と自注を小字双行で墨書し，『本草集注』3巻とした．その上巻は総論の序録で，中・下巻の薬物各論では玉石草木などの自然分類に上中下薬の3分類を併用した．

⑤この3巻本は各論の中・下巻が長すぎた．そこで弘景段階ないし7世紀前半までに，注の小字双行文を1枡下げの大字単行文にあらため，中・下巻をそれぞれ3巻にわけた計7巻本に再編された．

唐宋の本草書

『本草集注』そのものは，後述する2点が部分的ながら出土しているにすぎない．ただし，唐政府は本書の7巻本にもとづき増補・改訂した『新修本草』20巻を659年に勅撰し，『本経』文と『別録』文を朱墨で雑著する書式も踏襲した．さいわい『新修本草』自体は，遣唐使将来系の仁和寺本（国宝）と敦煌出土本により，約半量が残存する．

宋代になると，『新修本草』を核に雪だるま式に増補・改訂した勅撰本草書が，たびたび出版された．うち大観2年（1108）の『大観本草』にもとづく金1214年復刻版（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）と，政和6年（1116）の『政和本草』にもとづく蒙古1249年復刻版（中国国家図書館蔵）が現存最古本で，ともに全巻がそろっている．

したがって以上の編纂過程を正確に遡上できるなら，『本経』4巻は復原可能となる．いま通行している『本経』は，おおむね当歴史を遡って輯佚・校訂された復原本である．ただし使用した史料の有無や善本性に相違があり，もはや無価値となった復原本もある．また当手法でたとえ正確に復原できたとしても，陶弘景の校訂以前には基本的に遡りえないことに注意しなければならない．

図1　藤原宮木簡

出土した『本草集注』と通説の問題

藤原宮（694～710）の遺跡から，「大宝三年（703）」や「典薬」さらに「（本）草集　本草集注……本本草」と習書された木簡の削屑，「本草集注上巻」と記された木簡（74番）などが出土し，1969年に報告[8]された．これらは703年以降に廃絶された溝のSD105から出土し，典薬寮関係のものだった．図1右は木簡74番の表面，左はわたしの模写である．

木簡に記された「本草集注」は，703年前後の日中の著録や伝来状況から判断し，陶弘景の『本草集注』以外にありえない．『本草集注』の文字数から2巻本は無理なので，「本草集注上巻」の墨書は3巻本を意味する[9]．

他方，ドイツのグリュンヴェーデルとル・コックらが，1902～12年の4回の探検で獲得した品々

図2　トルファン本『本草集注』

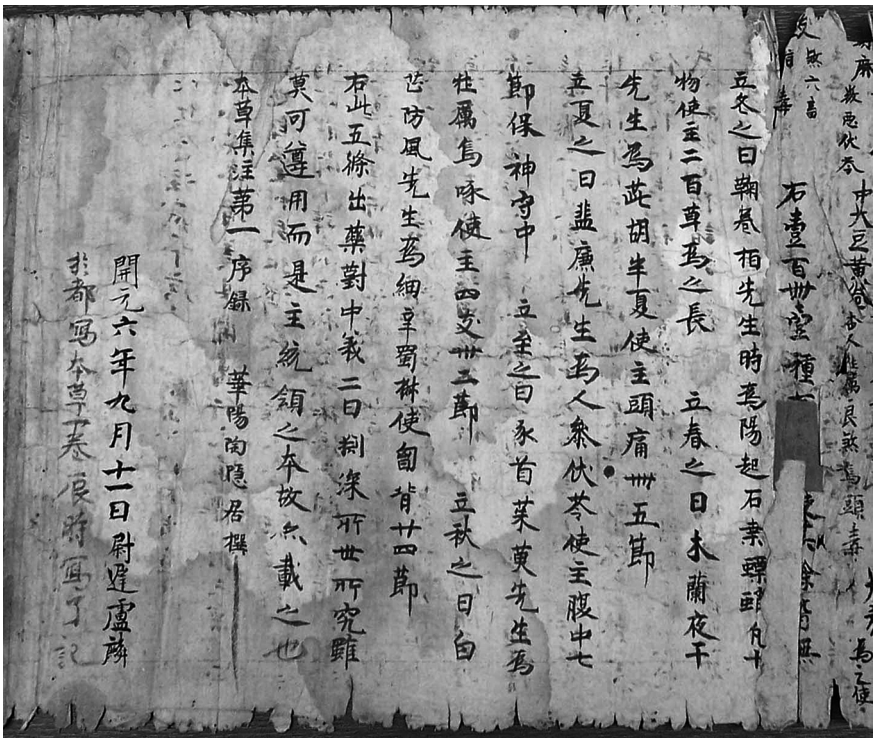

図3　敦煌本『本草集注』

のなかには，トルファン出土の『本草集注』断簡もあった．現在はベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーの，トルファンコレクションに所蔵される図2である．

この断簡に唐の避諱はみえないが，書風より7世紀初の筆写と判断される．そして朱墨雑書・小字双行注の書式と単位面積あたりの字数から，3巻本『本草集注』巻下の断簡と判断された[9]．

さらに大谷光瑞探検隊の橘瑞超が，敦煌莫高窟より1912年に将来した7巻本『本草集注』の巻1「序録」部分（図3）も，龍谷大学大宮図書館に所蔵される．図のように，巻末に「開元六年（718）九月十一日　尉遲盧麟／於都写本草一巻　辰時写了記」の識語がある．この識語第1行と第2行の墨色が違うため，かつて捏造説もあった．しかし近年，本文全文字との比較から識語は後世の加筆でなく，当巻子もまちがいなく718年の所筆と確証されている[10]．

ここで陶弘景による『本草集注』の編纂過程について，従来の通説だった岡西為人説[11,12]をのべておきたい．これら出土文献の検証からすると，前述した①～⑤の編纂過程をかんがえるべきで，岡西説は成立しえないからである．

岡西氏によると弘景は第1に，「経」字のない『神農本草』4巻の伝本を整理して365薬とした．第2に当365薬につき，『名医別録』という書から『神農本草』と異なる条文を補填．第3に『名医別録』から『神農本草』にない365薬と条文も採録し，730薬で「経」字のある『神農本草経』3巻を最初に編纂した．この3巻本は朱墨の経文だけで構成される．第4として，自編の3巻本に「薬対」文と自注を増補して7巻本『本草集注』を編纂した．そして注のない3巻本より注のある7巻本の方が便利なので，一般には多く7巻本が流布した，という．

このように，弘景は無注本『神農本草経』3巻と有注本『本草集注』7巻の2書を編纂した，と岡西氏はかんがえている．しかし『本草集注』に3巻本もあったことは，藤原宮木簡の記載からあきらかだろう．残念なことに，氏は当木簡の存在

に気づいていなかった．しかも歴代の著録に3巻本『本草集注』はみえない．一方，図2のトルファン出土断簡の縦横寸法が逆に報告されていたことで，渡邊氏は面積あたりの記載可能字数を誤算し，7巻本の断簡と判断していた[13]．それゆえ岡西氏は3巻本『本草集注』の存在を否定するため，以前の『本経』は「経」字のない『神農本草』4巻で，弘景は「経」字がある『神農本草経』3巻を編纂したという苦しい解釈をしたらしい．岡西氏がいう弘景の無注本『神農本草経』3巻は存在せず，それは弘景の有注本『本草集注』3巻の誤認だったのである．

ともあれ，『本経』の旧態に遡るためのもっとも有力な史料は『本草集注』しかない．その姿は3巻本のトルファン本，7巻本の敦煌本からうかがうことができる．しかし両者は『本草集注』の一部でしかなく，『本経』にせまるには別史料も使用しなければならない．

『本経』の復原

『本経』の全文を収録した書では『本草集注』が完全だった．のち唐政府が『本草集注』7巻本を増補した『新修本草』20巻を編纂し，うち計10巻が京都の仁和寺等から幕末に発見されている．敦煌からも『新修本草』の断簡が出土している．日本では平安～鎌倉時代の『新撰字鏡』『本草和名』『和名類聚抄』『医心方』『弘決外典抄』『政事要略』などに，『新修本草』の佚文が保存された．さらに前述のように，宋政府編纂の『大観本草』系と『政和本草』系の版本に，『新修本草』の全文章は基本的に踏襲・引用されている．したがって『新修本草』はほぼ復原可能であり，さらに『本草集注』もかなりの精度で復原できるといっていい．

問題は『本草集注』の『本経』文が陶弘景の整理をへているため，それ以前へどう遡るかである．それには『本経』の旧姿がイメージされねばならない．さいわい弘景の手をへない『本経』の条文は，『太平御覧』所引の「本草経」「本草」に相当のこることを渡邊氏が考証している[14]．さらに『本草集注』以前に成立の『小品方』（454～478）にも，『本経』の旧文が保存されていた．

小曽戸洋氏とわたしは1984年，駒場の尊経閣文庫に所蔵される鎌倉末期巻子本医書が『小品方』巻1であるのに気づいた．しかも本書は遣隋使将来本に由来していた[15]．当巻子本と，隋の『諸病源候論』（610）に引用される『小品方』佚文には次の記載がある．

> 検神農本草経，説草石性味，無対治之和．（『諸病源候論』巻6所引）
> 本草薬族，極有三百六十五種．其本草所不載者，而野間相伝所用者，復可数十物…….
> 又撰本草薬性要物所主治者一巻，臨疾看之．増損所宜，詳薬性寒温以処之…….
> 述用本草薬性一巻第十一，灸法要穴一巻第十二巻．右二巻連要方合十二巻…….
> （以上，巻子本『小品方』巻1）

これら記載より，『小品方』12巻を編纂した陳延之は365種をおさめる『本経』を実際に参照し，巻11の「本草薬性」篇を編纂していたことが知られた[16]．

ところで，図2のトルファン本『本草集注』の天鼠（コウモリ）屎条には，以下のように記される（下線部は朱筆の『本経』文）．

> 天鼠屎．味辛寒，有毒．主治面癰腫，皮膚説説時痛，腹中血気，破寒熱積聚，除驚悸，去面黒皯．一名鼠沽，一名石肝．生冷浦山谷．十月・十二月取（以上は大字経文）．悪白斂・白薇（以上は小字双行の「薬対」文）．方家不用，世不復識此耳（以上は小字双行の陶弘景注文）．

この内容に注意すると，以下の順次で記載されているのがわかる．

> 正名　気味　毒性　主治　一名　出処　採取時期　薬対文　弘景注文

当順次は前後の条文でも一致しているので，『本草集注』各論の条文はおよそ同様に統一されていただろう．一方，『小品方』巻11本草篇の佚

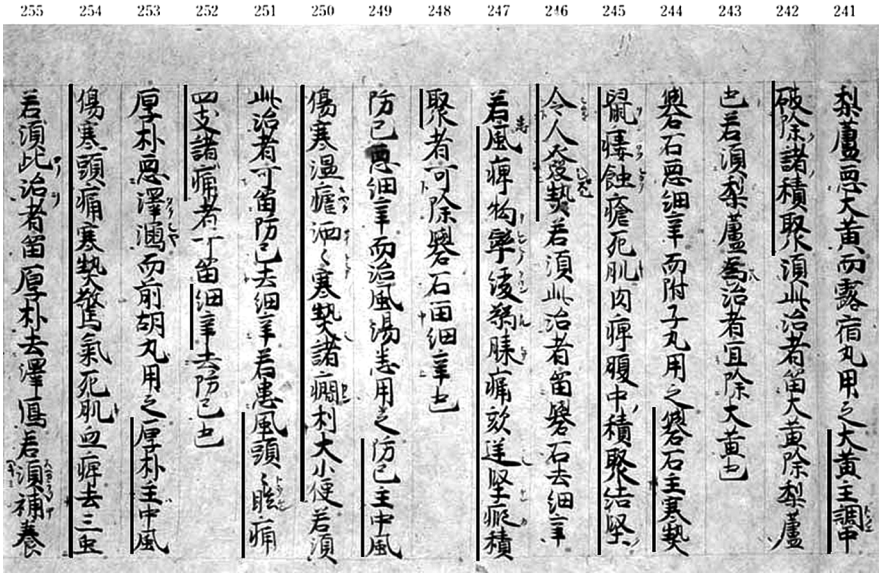

図4　古鈔本『小品方』（尊経閣文庫所蔵）

文および『太平御覧』所引の「本草経」「本草」佚文を検討すると，両者の記載は以下の順次で一致していた．

正名　一名　気味　出処　主（治）

このように『本草集注』で朱書された下線部，つまり『本経』内容の記載順次は，陶弘景以前の『本経』佚文と大きく相違する．当相違は，弘景が『本草集注』を編纂した際の改変にうたがいない．弘景の改変はほかにもある．

『小品方』巻11本草篇からと確証された佚文は18条とすくなく，多くは「一名」部分の断片的引用だった[16]．ただし現存する巻1部分の「述増損旧方用薬犯禁決」には，図4に傍線でしめした『本経』主治文の佚文と目される記載がすくなからずある．そして「大黄，主調中……」のように，いずれも「主」の一字から書きだす．ところが『本草集注』はトルファン本の図2でわかるように，「主治」の二字で書きだす．さらに唐政府が編纂した『新修本草』は，仁和寺本も敦煌本も「主」の一字に作る．『本草集注』の「主治」を『新修本草』が「主」に改めたのは，唐高宗・李治の避諱で「治」を削除したからと判断していい．

他方，『太平御覧』の「本草経」「本草」佚文では「主」の場合が多いが，一部は「治」に作る．これは『太平御覧』が引用した唐代文献における避諱の有無によるかもしれない．しかし遣隋使将来本系で，唐代避諱がありえない『小品方』巻1末尾の医方主治文でも，「主」で記す条文と「治」で記す条文が混在する．したがって，すでに弘景以前で両者が混用されていたため，『本草集注』では併用して「主治」に統一した可能性がたかい．

『本経』の復原には以上のほかに，収載薬の分類・配順や漢代の古字に遡る問題など，まだ議論すべき課題が多い．とはいえ『本経』の復原はすでに宋代からはじまっていた．なかでも清末・孫星衍本（1799）の精度がたかいが，弘景による前述の改変に気づいていない．清代には，史料価値のない『本草綱目』にもとづく復原本まで出現している．

日本では孫星衍本などの刺激で，江戸後期にまず鈴木良知（1761～1817）が『神農本経解故』で復原をこころみた．ついで狩谷棭斎の校定本（1824）があり，南京図書館蔵の山田業広手沢本を見ると相当のレベルに達している．しかし手順をふむため，幕府医官の小島宝素は第1に『新修本草』を復原（1832）し，のち仁和寺本の欠巻部分

のみ保存した（台北・故宮博物院図書文献館所蔵）．さらに小島尚真ら江戸医学館に集った若き俊英らは，『新修本草』『本草和名』『医心方』など当時発見された最善の古文献も駆使し，第2に『本草集注』を精緻に考証復原（1850）している．その第2次稿本（1852）は1901年に来日した羅振玉が購入して中国へわたったが，満洲医大の岡西為人氏がふたたび入手し，2008年にご子息より京都大学人文科学研究所に寄託された．

以上の段階をふまえ最終的に復原されたのが森立之本『本経』（1854）で，その精度は孫本・狩谷本をはるかに上まわり，前人未踏の域に達している．現代中国でも森本を参考に復原本が出版されている．しかし上述の記載順次や主・治の問題，日本伝存文献と出土文献の使用などで，いささかの瑕疵なしとはしない．今後は『小品方』や敦煌本・トルファン本『本草集注』も十分に利用し，さらなる復原精度の向上がまたれる．

文献

1）胡平生・韓自強．『万物』略説．文物　1988；4: 48–53
2）司馬遷．史記．北京：中華書局；1982．p. 2794–2796
3）班固撰・顔師古注．漢書．北京：中華書局；1962．p. 1258・3706
4）班固撰・顔師古注．漢書．北京：中華書局；1962．p. 1778
5）山田慶兒．本草の起源．中国古代科学史論．京都：京都大学人文科学研究所；1989．p. 451–567
6）真柳誠．『神農本草経』の問題．斯文　2010；119: 92–117
7）上山大峻編．〔敦煌写本〕本草集注序録・比丘含注戒本（龍谷大学善本叢書16）．京都：法蔵館；1997．p. 242
8）奈良県教育委員会．藤原宮（奈良県史跡名勝天然物調査報告第25冊）．奈良：奈良県教育委員会；1969．p. 6
9）真柳誠．3巻本『本草集注』と出土史料．薬史学雑誌　2000；35(2): 135–143
10）藤枝晃．写本解題．上山大峻編．〔敦煌写本〕本草集注序録・比丘含注戒本（龍谷大学善本叢書16）．京都：法蔵館；1997．p. 207–219
11）岡西為人．『神農本草経に就いて』を読む．日本医史学雑誌　1944；1323: p. 1–13
12）岡西為人．本草概説．大阪：創元社；1977．p. 53
13）渡邊幸三．中央亜細亜出土本草集注残簡に対する文献学的研究．日本東洋医学会誌　1954；5(4): 35–43
14）渡邊幸三．陶弘景の本草に対する文献学的考察．東方学報　1951；20: 195–222
15）小曽戸洋．『小品方』序説―現存した古巻子本．日本医史学雑誌　1986；32(1): 1–25
16）真柳誠．新発見，『小品方』巻11・本草篇の研究．薬史学雑誌　1989；24(1): 37–46